カナダのカーニー首相がダボス会議での基調講演で世界的に注目された理由

1/26(月) 12:55 配信

COURRiER JAPON

カナダのマーク・カーニー首相による「ダボス会議」での基調演説が聴衆の心をとらえ、世界的な注目を集めている。その理由は何なのか。**翌日のドナルド・トランプ米大統領による基調演説とはどう違うのか**。英国の政治学者が、両者の演説を比較しながら読み解く。

スイスのダボスで開かれた世界経済フォーラムで最も期待度の高かった 2 つの基調演説は、会議も会場も同じながら、似ても似つかないスタイルと論調だった。

1 月 20 日、カナダのマーク・カーニー首相は、金融の深い専門知識を持つ一国の首脳として、集まった政界やビジネス界のリーダーたちに語りかけた。 **世界秩序が「断裂」しており、全体の利益のために、適切な同盟関係を通じて団結する責務が各国にはあるとカーニーは主張**した。 それは**多国間主義への賛歌ではあったが、米国はもはや同盟関係のまとめ役にならないことを認識したもの**だった。カーニーは演説で、米国の名前を挙げることなく、「超大国」や「覇権国」という言葉を代わりに使った。

カーニーの落ち着いた、慎重かつ示唆に富む論調は、リーダーとなるに相応しい素質があることをはっきり示していた。フランスのエマニュエル・マクロン大統領にとっては自分もそうなりたいと憧れるリーダーの姿を、英国のキア・スターマー首相にとっては自分がそうなるのを躊躇するリーダーの姿をカーニーは示したのだ。

その論調は明快であり、**自国の真下にいる“ガキ大将”を恐れていなかった**。米国のドナルド・トランプ大統領に立ち向かうカーニーは、寸分の隙もない政治家のようだった。

Mark Shanahan

ニューヨーク・タイムズ（米国）Text by Linda Qiu

ダボス会議でのトランプ米大統領のスピーチを、米紙「ニューヨーク・タイムズ」が検証。グリーンランドの歴史における米国の役割や NATO に関する情報をはじめ、誤解を招く発言が含まれていた。

スイスで開催中の世界経済フォーラム年次総会（通称「ダボス会議」）で 1 月 21 日、トランプ米大統領は演説をおこない、NATO 同盟国を非難するとともにグリーンランド獲得への野心を改めて表明した。

演説で飛び出した、彼の数々の発言は正しかったのだろうか？　ここで検証してみよう。

「戦後、我々はグリーンランドをデンマークに返還した。なんて愚かなことをしたのか。だが、そうした。返還したのだ」

これは誤解を招く表現だ。**トランプはおそらく、第二次世界大戦期に結ばれた米国とデンマーク間の防衛協定を指して**いる。しかしその協定は、米国にグリーンランドの主権や支配権を与えるものではなかった。
ナチスによるデンマーク侵攻後の 1941 年、在米デンマーク大使がこの協定を結び、グリーンランド保護と引き換えに米国に同地の軍事基地使用権を与えた。

スタンフォード大学の歴史学教授で欧州の主権問題を専門とするスティーブン・プレスは、この協定について「**法的根拠が脆弱**だった。なぜなら、米国駐在大使（実質的に亡命政府として機能していた）以外のデンマーク国家機関が関与していなかったからだ」と述べる。

コペンハーゲンにあるデンマーク国際問題研究所の研究員ミケル・ルンゲ・オレセンも、合意には限界があったと指摘する。「彼は島々を引き渡したわけではない。基地使用権のみを認めただけだ」

この協定には、デンマークのグリーンランドに対する主権についての言及が複数含まれており、**同国をグリーンランドの「母国」としている**。一節にはこうある。「米合衆国政府は、デンマーク王国がグリーンランドに対して有する主権を改めて承認し、尊重する」